

天鷲絨

石川啄木

青空文庫

理髮師とこやの源助さんが四年振で來たといふ噂が、何か重大な事件でも起つた様に、口から口に傳へられて、其午後のうちに村中に響き渡つた。

村といつても狭いもの。盛岡から青森へ、北上川に纏もつれて透うねう迤ねと北に走つた、坦々たる其一等道路（と村人が呼ぶ）の、五六町並木の松が斷絶とだえて、兩側から傾き合つた茅葺勝の家並の數が、唯九十何戸しか無いのである。村役場と駐在所が中央程なかに向合つてゐて、役場の隣が作右衛門店、萬荒物から酢醬油石油荳、

鑊詰の酒もあれば、前掛半襟にする布帛もある。箸で斷れぬ程堅い豆腐も賣る。其隣の郵便局には、此村に唯一つの軒燈がついてるけれども、毎晩點火する譯ではない。

お定がまだ少かつた頃は、わか此村に理髮店といふものが無かつた。村の人達が其頃、頭の始末を奈何してゐたものか、今になつて考へると、随分不便な思をしたものであらう。それが、九歳か十歳の時、大地主の白井様が盛岡から理髮師を一人お呼びなされるといふ噂が恰も今度源助さんが四年振で來たといふ噂の如く、異様な驚愕を以て村中に傳つた。おどろき間もなく、とある空地に梨箱の様な小さい家が一軒建てられて、其家が漸々壁塗を濟ませた許りの處へ、三十恰好の、背の低い、色の黒い理髮師が遣つて來た。頗

るの淡きさくもの白者で、上方辯なめらの滑かな、話巧者の、何日いつ見てもお愛想が好いところから、間もなく村中の人の氣に入つて了つた。それが即ち源助さんであつた。

源助さんには、お内儀かみさんもあれば息子むすこもあるといふ事であつたが、來たのは自分一人。愈々開業となつてからは、其店そこの大きい姿見が、村中の子供等の好奇心を刺戟したもので、お定もよく同年輩の遊び仲間と一緒に、見た事もない白い瀬戸の把ハンドルルを上に捻ひねり下に捻ひねり、辛やつと少許すこし入口の扉を開けては、種々な道具の整然と列べられた室の中を覗いたものだ。少し開けた扉が、誰の力ともなく、何時いつの間にか身體の通るだけ開くと、田舎の子供といふものは因循なもので、盗みでもする様に怖おっかびつくな怯り、二寸

三寸と物も言はず中に入つて行つて、かはりがはり交代に其姿見を覗く。
をかし訝な事には、少し離れて寫すと、顔が長くなつたり、ひらた扁くなつたり、ゆが目も鼻も歪んで見えるのであつたが、お定は幼心おさなに、これは鏡が餘り大き過ぎるからだと考へてゐたものだ。

月に三度の一日を除いては、（此日には源助さんが白井様へ上つて、お家中の人の髪を刈つたり顔を剃つたりするので、）大抵村の人が三人四人、源助さんの許とこで苮ふかを喫しながら世間話をしてゐぬ事はなかつた。一年程た経つてから、白井様の番頭を勤めてゐた人の息子で、薄野呂などころからノ口勘と綽名あだなされた、十六の勘之助といふのが、源助さんに弟子入をした。それからといふものは、今迄近づき兼ねてゐた子供等まで、理髮店の店を遊場に

して、暇な時にはよく太閤記や、義経や蒸汽船や加藤清正の譚を聞かして貰つたものだ。源助さんが居ない時には、ノ口勘が錢函から銅貨を盗み出して、子供等に餡麵麩を振舞ふ事もあつた。振舞ふといつても、其實半分以上はノ口勘自身の口に入るのだ。

源助さんは村中での面白い人として、衆人みんなに調法がられたものである。春秋はるあきの彼岸ひがんにはお寺よりも此人の方が、餅を澤山貰ふといふ事で、其代り又、何處の婚禮にも葬式にも、此人の招よばれて行かぬ事はなかつた。源助さんは、啻たゞに話巧者で愛想が好い許りでなく、葬式に行けば青や赤や金の紙で花を拵へて呉れるし、婚禮の時は村の人の誰も知らぬ「高砂」の謠をやる、加のみなら之ず、何事にも器用な人で、割烹の心得もあれば、植木いじ弄りも好き、

義太夫と接木が巧者で、或時は白井様の子供衆のために大奉八枚張の大紙鳶だこしらを拵だこしらへた事もあつた。其處此處の夫婦喧嘩や親子喧嘩に仲裁を怠らなかつたは無論の事。

左さ右かうしてゐるうちに、お定は小学校も尋常科だけ卒へて、子守をしてゐる間に赤い袖口が好になり、髪かみの油あぶらに汚れた手拭ひとりを獨ひとり自でに洗でつて冠かぶる様になつた。土土用つちが過ぎて、肥料こやしつけの馬うまの

手綱てなを執とる様になると、もう自みづづと男羞おとこづかしい少女心しょうじうしんが萌もして來て、盆ぼんの踊おどに夜よを明あすのが何なにより樂たのしい。隨したがつて、ノ口勘のくちかんの朋輩ともだちの若衆わかしゅが、無駄むだ口くちを戰たたかはしてゐる理髮師りはつしの店みせにも、おのづと見舞みまふ事ことが稀まれになつたが、其頃そのときの事こと、源助げんすけさんの息子むすこさんだといふ親おやに似にぬ色いろ白しろの、背せのすらりとした若わかい男おとこが、三月さんがつ許ゆるりも來きてゐた事ことが

あつた。

お定が十五（？）の年、も少しで盆が來るといふ暑氣盛りの、踊に着的浴衣やら何やらの心構へで、娘共にとつては一時も氣の落着く暇がない頃であつた。源助さんは、郷里（と言つても、唯上方と許りしか知らなかつたが、）にゐる父親が死んだとかで、俄かに荷造をして、それでも暇乞だけは家毎にして、家毎から御餞別を貰つて、飼かひなら馴なした籠かごの鳥でも逃げるかの様に村中から惜まれて、自分でも甚ひどく残のこ惜りしさうにして、二三日の中にフイと立つて了つた。立つ時は、お定も人々と共に、一里許りのステーションまで見送つたのであつたが、其歸途、とある路傍の田に、稻の穂が五六本出初めてゐたのを見て、せめて初米の餅でも搗く

まで居れば可いのにと、誰やらが眩つぶやいた事を、今でも夢の様に記憶おぼえて居る。

何しろ極く狭い田舎なので、それに足下から鳥が飛立つ様な別れ方であつたから、源助一人の立つた後は、祭禮の翌日か、男許りの田植の様で、何としても物足らぬ。閑人の誰彼は、所在無げな顔をして呆然と門口に立つゐた。一月許りは、寄ると障ると行つた人の話で、立つ時は白井様で二十圓呉れたさうだし、村中からの御餞別を合せると、五十圓位集つたらうと、羨ましさうに計算する者もあつた。それ許りぢやない、源助さんは此五六年に、百八十兩もおツ貯ためたげなど、知つたか振をする爺もあつた。が、此源助が、白井様の分家の、四六時しよつちう中リユウマチで寝てゐる奥様

に、或る特別の慇懃いんぎんを通じて居た事は、誰一人知る者がなかつた。

二十日許りも過ぎてからだつたらうか、源助の禮状の葉書が、三十枚も一度に此村に舞込んだ。それが又、それ相應に一々文句が違つてると云ふので、人々は今更の様に事々しく、渠の萬事に才が　つて、器用であつた事を語り合つた。其後も、月に一度、三月に二度と、一年半程の間は、誰へとも限らず、源助の音信があつたものだ。

理髮店とこやの店は、其頃兎や角一人前になつたノ口勘が譲られたので、唯一軒しか無い僥倖しあはせには、其間が抜けた無駄口おきやくに華客を減らす事もなく、かの凸凹の大きな姿見が、今猶人の顔を長く見

せたり、ひらた扁く見せたりしてゐる。

其源助さんが四年振で、突然遣つて來たといふのだから、もう殆ど忘れて了つてゐた村の人達が、男といはず女といはず、腰の曲つた老人や子供等まで、異様に驚いて目を睜つたのも無理はない。

二

それは盆が過ぎて二十日と經たぬ頃の事であつた。午ひるなか中三時間許りの間は、夏の最中にも劣らぬ暑氣で、澄みきつた空からはそよ習との風も吹いて來ず、素足の娘共は、日に焼けた礫の熱いのを

避けて、軒下の土の濕りを歩くのであるが、裏畑の梨の樹の下に落ちて死ぬ蟬の數と共に、秋の香が段々深くなつて行く。日出前の水汲に素袷の襟元寒く、夜は村を埋めて了ふ程の蟲の聲。田といふ田には稻の穂が、琥珀色こほくに寄せつ返しつ波打つてゐたが、然し、今年は例年よりも作が遙はずつと劣つてゐると人々が呟こぼしあつてゐた。

春から、夏から、待ちに待つた陰曆の盂蘭盆うらぼんが來ると、村は若い男と若い女の村になる。三晩續けて徹夜よどほしに踊つても、猶踊り足らなくて、雨でも降れば格別、大抵二十日盆が過ぎるまでは、太鼓の音に村中の老人達が寝つかれぬと口説くどく。それが濟めば、苟くも病人不具者でない限り、男といふ男は一同泊掛とまりがけで東嶽

に萩刈に行くので、娘共の心が譯もなくがっかりして、一年中の無聊を感じるのは此時である。それも例年ならば、收穫後の嫁取婿取の噂に、嫉妬交りの話の種は盡きぬのであるけれども、今年のように作が悪くては、田畑が生命の百姓村の悲さに、これぞと氣の立つ話もない。其處へ源助さんが來た。

突然四年振で來たといふ噂に驚いた人達は、更に其源助さんの服装の立派なのに二度驚かされて了つた。萬の知識よろづの單純な人達には何色とも呼びかねる、茶がかつた灰色の中折帽は、此村では村長様とお醫者様と、白井の若旦那の外冠やほらかものする人がない。繪甲斐絹の裏をつけた羽織も、袴も、縞ではあるが絹やはらかもの布物で、角帶も立派、時計も立派、中にもお定の目を聳たしめたのは、づしりと重

い總革の旅行鞆であつた。

宿にしたのは、以前一番懇意にした大工の兼さんの家であつたが、其夜は誰彼の區別なく其家を見舞つたので、奥の六疊間に三分心の洋燈ランブは暗かつたが、入いり交かはり立交りるす人の數は少くなく、潮の様な蟲の音も聞えぬ程、賑かな話聲が、十一時過ぐるまでも戸外に洩れた。娘共は流石に、中には入りかねて、三四人店先に腰掛けてゐたが、其家の總領娘のお八重といふのが、座敷から時々出て來て、源助さんの話を低聲こゝろに取次した。

源助さんは、もう四十位になつてゐるし、それに服裝の立派なのが一際品格を上げて、舉ものごし動ごしから話振から、昔より遙かに容體づいてゐた。随つて、其昔「お前めえ」とか「其方そご」とか呼び慣して

ゐた村の人達も、期せずして皆「お前様めえさま」と呼んだ。其夜の話では、源助は今度函館にゐる伯父が死んだのへ行つて來たので、汽車の歸途かへりの路すがら、奈何どうしても通とほりぬけ拔ぬが出来なかつたから、突然ではあつたが、なつかしい此村を訪問したと云ふ事、今では東京に理髪店を開いてゐて、熟練な職人を四人も使つてゐるが、それでも手が足りぬ程忙がしいといふ事であつた。

此話が又、響を打つて直ぐに村中に傳はつた。

理髪師といへば、餘り上等な職業でない事は村の人達も知つてゐる。然し東京の理髪師と云へば、怎どうやら少し意味が別なので、銀座通の寫眞でも見た事のある人は、早速源助さんの家の立派な事を想像した。

翌日は、各々めい／＼自分の家に訪ねて来るものと思つて、氣早の老人などは、花莫蔭はなごかげを押入から出して爐邊に布いて、澁茶を一掴み隣家から貰つて來た。が、源助さんは其日朝から白井様へ上つて、夕方まで出て來なかつた。

其晩から、かの立派な鞆から出した、手拭やら半襟やらを持つて、源助さんは殆ど家毎に訪ねて歩いた。

お定の家へ來たのは、三日目の晩で、晝には野良に出て皆留守だらうと思つたから、態々後しにして夜に訪ねたとの事であつた。そして、二時間許りも麥煎餅を噛りながら、東京の繁華な話を聞かせて行つた。銀座通りの賑ひ、淺草の水族館、日比谷の公園、西郷の銅像、電車、自動車、宮様のお葬式、話は皆想像もつ

かぬ事許りなので、聞く人は唯もう目を睜みはつて、夜も晝もなく渦巻く火炎に包まれた様な、凄じい程な華やかさを漠然と頭腦あたまに描いて見るに過ぎなかつたが、淺草の觀音様に鳩がゐると聞いた時、お定は其そんな所にも鳥なぞがゐるか知らと、異様に感じた。そして、其そんな所から此人はまあ、怎どうして此處まで來たのだらうと、源助さんの得意氣な顔を打瞶まもつたのだ。それから源助さんは、東京は男にや職業が一寸見附り悪いけれど、女なら幾何いくらかでも口がある。女中奉公しても月に賄附で四圓貰へるから、お定さんも一二年行つて見ないかと言つたが、お定は唯俯ほいて微笑ゑんんだのみであつた。怎どうして私などが東京へ行かれよう、と胸の中で呟つぶやいたのである。そして、今日隣家の松太郎といふ若者が、源助さんと一緒に東京

に行きたいと言つた事を思出して、男ならばだけでも、と考へてゐた。

三

翌日は、例の様に水を汲んで來てから、朝草刈に行かうとしてると、秋の雨がしとく降り出して來た。厩うまやには未だ二日分許り秣まぐさがあつたので、隣家の松太郎の姉に誘はれたけれども、父爺おやぢが行かなくても可いと言つた。仕様事なさに、一日門口へ立つて見たり、中へ入つて見たりしてゐたが、蛇の目傘をさした源助さんの姿が、時々彼方あち此方こちに見えた。禿頭の忠太爺と共に、お定の家

の前を通つた事もあつた。其時、お定は何故といふ事もなく家の中へ隠れた。

一日降つた肅しめやかな雨が、夕方近くなつて霽あがつた。と穢きたならしい子供等が家々から出て來て、馬糞交りの泥濘こを、素足で捏ね返して、學校で習つた唱歌やら流行歌やらを歌ひ乍ら、他愛もなく騒いでゐる。

お定は呆ぼんやり然と門口に立つて、見るともなく其を見てゐると、大工の家のお八重の小さな妹が驅けて來て、一寸來て呉れといふ姉の傳言ことづてを傳へた。

また曩日いつかの様に、今夜何處かに酒宴さかもりでもあるのかと考へて、お定は慎つつましやかに水潦みづたまりを避けながら、大工の家へ行つた。お

八重は欣々いそぐと迎へたが、何か四邊あたりを憚はゞかる様子で、密そつと裏口へ伴つれて出た。

『何處えさ行げや?』と大工の妻は爐邊ろばたから聲をかけたが、お八重は後も振向かずに、

『裏さ。』と答へた儘。戸を開けると、雞が三羽、こツこツといひながら入つた。

二人は、裏畑の中の材木小屋に入つて、積み重ねた角材もたに凭たれ乍ら、雨に濕しめつた新しい木の香を嗅いで、小一時間許りも密々ひそく語つてゐた。

お八重の話は、お定にとつて少しも思おもひ設もうけぬ事であつた。『お定さん。お前も聞いたべす、源助さんから昨晚ゆべな、東京の話

。』
 『聞いたす。』と穩かに言つて、お八重の顔を打瞶うちまもつたが、何故か「東京」の語一つだけで、胸が遽かに動悸がして來る様な氣がした。

稍あつて、お八重は、源助さんと一緒に東京に行かぬかと言ひ出した。お定にとつては、無論おもひも思設おもひもけぬ相談ではあつたが、然し、盆過すぎのがつかりした心に源助を見た娘には、必ずしも全然縁のない話でもない。切りしきなしに騒ぎ出す胸に、兩手を重ねながら、お定は大きい目を睜みはつて、言葉少なにお八重の言ふ所を聞いた。

お八重は、もう自分一人は確然ちやんと決心してゐる様な口吻くちぶりで、聲

は低いが、眼が若々しくも輝く。親に言へば無論容易に許さるべき事でないから、黙つて行くと云ふ事で、請うけうり賣の東京の話を長々とした後、怎どうせ生れたからには恁こんな田舎に許り居た所で詰らぬから、一度東京も見ようぢやないか。「若い時ア二度無い」といふ流行唄はやりうたの文句まで引いて、熱心にお定の決心を促すのであつた。

で、其方法も別に面倒な事は無い。立つ前に密こつそり衣服きものなどを取纏めて、幸こひ此村こから盛岡の停車場に行つて驛夫をしてる千太郎といふ人があるから、馬車追の權作老爺に頼んで、豫じめ其千太郎の宅まで届けて置く。そして、源助さんの立つ前日に、一晚泊で盛岡に行つて來ると言つて出て行つて、源助さんと盛岡から一

緒に乗つて行く。汽車賃は三圓五十錢許りなさうだが、自分は郵便局へ十八圓許りも貯金してるから、それを引出せば何も心配がない。若し都合が悪いなら、お定の汽車賃も出すと言ふ。然しお定も、二三年前から田の畔くろに植ゑる豆を自分の私得ほまちに貰つてるので、それを賣つたのやら何やらで、矢張九圓近くも貯めてゐた。

東京に行けば、言ふまでもなく女中奉公をする考へなので、それが奈何どんなに辛くとも野良稼どぎに比べたら、朝飯前の事ぢやないかとお八重が言つた。日本一の東京を見て、食はして貰つた上に月四圓。此村あたりの娘にはこれ程うま好い話はない。二人は、白粉やら油やら元結やら、月々の入費を勘定して見たが、それは奈何に諸式の高い所にしても、月に一圓とは要からなかつた。毎月三圓宛

残して年に三十六圓、三年辛抱すれば百圓の餘にもなる、歸りに半分だけ衣服や土産を買つて來ても、五十圓の正金が持つて歸られる。

『末藏が家でや、唯四十圓で家屋敷白井様に取上げられでねえすか。』とお八重が言つた。

『雖然なす、お八重さん、源助さん眞ほんに伴つれてつて呉けえべすか？』とお定は心配相に訊く。

『伴えれて行くともす。今朝誰も居えねえ時間いて見たば、伴えれてつても可ええつて居えたもの。』

『雖然だ、あの人しだつて、お前達の親達しさ、申譯だなくなるべす。』

『それでなす、先方あア着ちいてから、一緒あに行つた様ちでなく、後か

ら追驅けて來たで、當分東京さ置くからつて手紙寄越す筈にしたものす。』

『あの人しとだばさ、眞ほんに世話して呉けえる人しとにや人しとだども。』

此時、懷手してぶらりと裏口から出て來た源助の姿が、小屋の入口から見えたので、お八重は手招ぎしてそれを呼び入れた。源助はニタリ相好を崩して笑ひ乍ら、入口に立ち塞はだかつたが、

『まだ、日が暮れねえのに情夫をとこの話ぢや、天井の鼠が笑ひますぜ。』

お八重は手を舉げて其高聲を制した。『あの源助さん、今朝の話ほんア眞實とでごあんすよ。』

源助は一寸眞面目な顔をしたが、また直ぐ笑ひを含んで、『呟、

好しく、此老爺さんが引受けたら間違ツこはねえが、何だな、

お定さんも謀叛の一味に加つたな？」

『謀叛だど、まあ！』とお定は目を大きくした。

『だがねお八重さん、お定さんもだ、まあ熟く考へてみる事たね。

俺は奈何でも構はねえが、彼方へ行つてから後悔でもする様

ぢや、貴女方自分の事だからね。汽車の中で乳飲みたくなつた

と言つて、泣出されでもしちや、大變な事になるから喃。』

『誰了其に……。』とお八重は肩を聳かした。

『まあさ。然う直ぐ怒らねえでも可いさ。』

と源助さんはまたしても笑つて、『一度東京へ行きや、もう恁

所にや一生歸つて來る氣になりませんぜ。』

お八重は「歸つて來なくつても可い。」と思つた。お定は「歸つて來られぬ事があるものか。」と思つた。

程なく四邊あたりがもう薄暗くなつて行くのに氣が附いて、二人は其處を出た。此時までお定は、まだ行くとも行かぬとも言はなかつたが、兎も角も明日決きつかり然した返事をすると言つて置いて、も一人お末といふ娘にも勧めようと言ふお八重の言葉には、お末の家が寡ひとすくな人だから勧めぬ方が可いと言ひ、此話は二人限きりの事になると堅く約束して別れた。そして、表道を歩くのが怎どうやら氣が咎とがめる様で、裏路傳ひに家へ歸つた。明日返事をするとは言つたものの、お定はもう心の底では確然ちやんと行く事に決つてゐたので。

家に歸ると、母は勝手に手ランプを點けて、夕餉の準備したくに急は

しく立働いてゐた。お定は馬に乾秣やたを刻きつて鹽水に搔かきまはして與やつて、一擔ぎ水を汲んで來てから夕餉の膳ぜんに坐つたが、無暗に氣がそはそはしてゐて、麥八分の飯を二膳とは喰べなかつた。

お定の家は村でも兎に角食ふに困らぬ程の農家で、借財と云つては一文もなく、多くはないが田も畑も自分の所有もの、馬も青と栗毛と二頭飼つてゐた。兩親はまだ四十前の働者、母は眞の好人物で、吾兒にさへも強い語一つ掛けぬといふ性、父は又父で、村には珍しく酒も左程嗜たしなまず、定次郎の實直といへば白井様でも大事の用には特に選り上げて使ふ位で、力自慢に若者を怒らせるだけが悪い癖だと、老人達が言つてゐた。祖父も祖母も四五年前に死んで、お定を頭に男兒二人、家族といつては其丈で、長男の定吉

は、年こそまだ十七であるけれども、身體から働振から、もう立派に一人前の若者である。

お定は今年十九であつた。七八年も前までは、十九にもなつて獨身であると、餘あまされ者だと言つて人に笑はれたものであるが、此頃では此村でも十五六の嫁といふものは滅多になく、大抵は十八十九、隣家の松太郎の姉などは二十一になつて未だ何處にも縁づかずにゐる。お定は打見には一歳も二歳も若く見える方で、背恰好すわりの 乎としたさまは、農家の娘に珍らしい位、丸顔に黒味勝の眼が大きく、鼻は高くはないが笑窪えくぼが深い。美しい顔立ではないけれど、愛嬌に富んで、色が白く、漆の様な髪を生際の揃つた具合に、得も言へぬ艶なまめかしさが見える。稚ちひさい時から極く穩しい性質

で、人に抗さふといふ事が一度もなく、口惜しい時には物蔭かげに隠れて泣くぐらゐるなもの、年頃になつてからは、村で一番老人達の氣に入つてゐるのが此お定で、「お定ツ子は穩おとなしくて可ええ喃なう。」と言はれる度、今も昔も顔を染めては、「俺おら知らねえす。」と人の後に隠れる。

小學校での成績は、同じ級のお八重よりは遙ずつと劣つてゐたさうだが、唯一つ得意なのは唱歌で、其爲に女教員からは一番可愛がられた。お八重は此反對に、今は他に縁ゆづづいた異はらちがひ腹の姉と一緒に育そだつた所せ爲みか、負嫌あひの、我の強い兒で、娘盛りになつてからは、手もつけられぬ阿婆あば摺づれになつた。顔も亦評判娘のお澄といふのが一昨年赤痢で亡くなつてから、村で右に出る者が無いの

で、目尻に少し險しい皺があるけれど、面長のキリゝとした輪廓が田舎に惜しい。此反對な二人の莫迦に親なかよし密なのは、他の娘共から常に怪まれてゐた位で、また半分は嫉妬氣味から、「那あんなあ阿婆摺ぼづれと一緒にならねえ方が可ええす。」と、態々お定に忠告する者もあつた。

お定が其夜枕についてから、一つには今日何にも働かなかつた爲か、怎どうしても眠れなくて、三時間許りも物思ひに耽つた。眞黒すに煤けた板戸一枚の彼方から、安々と眠つた母の寢息を聞いては、此母、此家を捨て、何として東京などへ行かれようと、すぐ涙が流れる。と、其涙の乾かぬうちに、東京へ行つたら源助さんに書いて貰つて、手紙だけは怠らず寄越す事にしようと思へる。す

ると、すぐ又三年後の事が頭に浮ぶ。立派な服装をして、絹張の傘を持つて、金を五十圓も貯めて來たら、兩親だつて喜ばぬ筈がない。嗚呼其時になつたら、お八重さんは甚どんなに美しく見えるだらうと思ふと、其お八重の、今日目を輝かして熱心に語つた美しい顔が、怎どうやら嫉ねたましくもなる。此夜のお定の胸に、最も深く刻まれてるのは、實に其お八重の顔であつた。怎どうしてお八重一人だけ東京にやられよう！

それからお定は、小學校に宿直してゐた藤田といふ若い教員の事を思出すと、何時いつになく激しく情が動いて、私が之程思つてるのと思ふと、熱あつたかい涙が又しても枕を濡らした。これはお定の片思ひなので、否、實際はまだ思ふといふ程思つてるでもなく、

藤田が四月に轉任して來て以來、唯途で逢つて叩頭おしぎするのが嬉しかつた位で、遂十日許り前、朝草刈の歸りに、背負うた千草の中に、桔梗や女郎花が交つてゐたのを、むらはづれ村端で散歩してゐた藤田に二三本呉れぬかと言はれた、その時初めて言葉を交かはしたに過ぎぬ。その翌朝からは、毎朝咲残りの秋の花を一束宛、別に手に持つて來るけれども、藤田に逢ふ機會がなかつた。あの先生さへ優しくして呉れたら、何も私は東京などへ行きもしないのに、と考へても見たが、又、今の身分ぢや兎ても先生のお細君かみさんなどに成れぬから、矢張三年行つて來るのが第一だとも考へる。

四晩に一度は屹度きつとしの忍んで寢に來る丑之助——兼大工の弟子で、男振りもよく、年こそまだ二十三だが、若者中で一番幅の利く——

—の事も、無論考へられた。恚^かる田舎の習慣で、若い男は、忍んで行く女の數の多いのを誇りにし、娘共も亦、口に出していふ事は無いけれ共、通つて來る男の多きを喜ぶ。さればお定は、丑之助がお八重を初め三人も四人も情婦を持つてる事は熟^よく知つてゐるので、或晩の如きは、男自身の口から其情婦共の名を言はして撥^{くすぐ}つて遣^やつた位。二人の間は別に思合つた譯でなく、末の約束など眞面目にした事も無いが、怎^{どう}かして寝つかれぬ夜などは、今頃丑さんが女と寝てゐるか、嫉^やいて見た事のないでもない。私とお八重さんが居なくなつたら、丑さんは屹度お作の所に許りゆくだらうと考へると、何かしら妬^{ねた}ましい様な氣もした。

胸に浮ぶ思の數々は、それからそれと果^{はて}しも無い。お定は幾度

か一人で泣き、幾度か一人で微笑ほほえんだ。そして、遂うとくととなりかゝつた時、勝手の方に寝てゐる末の弟が、何やら聲高に寢言を言つたので、はつと目が覺め、嗚呼あの弟は淋しがらうなと考へて、睡氣ねむけ交りに涙ぐんだが、少女心の他愛なさに、二人の弟が貰ふべき嫁を、誰彼となく心で選んでゐるうちに、何時しか眠つて了つた。

四

目を覺ますと、弟のお清書を横に逆まに貼つた、枕の上の煤けた櫛れんじ子が、僅かに水の如く仄めいてゐる。誰もまだ起きてゐない。

遠をちこち近で二番鶏が勇ましく時をつくる。けたましい羽搏はばたきの音がする。

お定はすぐ起きて、寢室ねまにしてゐる四疊半許りの板敷を出た。手探りに草履ぞうりを突つかけて、表裏の入口を開けると、厩では乾秣やたを欲ほしがる馬の、破目板を蹴ける音がゴトゴトと鳴る。大桶を二つ擔かついで、お定は村端むらほづれの樋の口といふ水汲場に行つた。

例になく早いので、まだ誰も來てゐなかつた。漣さざなみ一つ立たぬ水槽の底には、消えかゝる星を四つ五つ鏤ちりばめた黎明の空が深く沈んでゐた。清冽な秋の曉の氣が、いと冷かに襟元から總身に沁む。叢にはまだ夢の様に蟲の音がしてゐる。

お定は暫時しばし水を汲むでもなく、水鏡に寫つた我が顔を噴みつめなが

ら、ほんやり 呆然と昨晚の《ゆうべ》の事を思出してゐた。東京といふ所は、ずっとく遠い所になつて了つて、自分がどう怎して其そんな所まで行く氣になつたらうと怪まれる。矢張自分は此村に生れたのだから、此村で一生暮らす方が本當だ。恚かうして毎朝水汲に來るのが何より楽しい。話の様な繁華な所だつたら、屹度きつと恚かういふ澄んだ美しい水などが見られぬだらうなど、考へた。と、後に人の足音がするので、振向くと、それはお八重であつた。矢張桶をぶらぶら擔いで來るが、寢きたれ髪の上はれのしどけなさ、起きた許りで脹はれぶつたくなつてゐるひとみ瞼さへ、殊更艶かしく見える。あの人が行くのだもの、といふ考へが、ほんやり 呆然とした頭をハツと明るくした。

『お八重さん、はや 早えなツす。』

『お前めえこそ早えなツす。』と言つて、桶を地面ぢべたに下した。

『あゝ、まだ蟲ア啼いてる！』とお八重やへは少し顔を歪ゆがめて、後れ毛を搔上げる。遠く近くで戸を開ける音が聞える。

『決きめたす、お八重さん。』

『決めたすか？』と言つたお八重の眼は、急に晴々しく輝いた。

『若しもお前行おらかなかつたら、俺一人どう奈何すべと思つてだつけす

』。

『だつてお前どう怎しても行くべえす？』

『お前も決きめたら、一緒に行くのす。』と言つて、お八重は軽く笑つたが、『そだつけ、大變だお定さん、急がねえばならねえす

』。

『怎してす？』

『怎してつて、昨晚聞いだら、源助さん明後日立つで、早く準備せツてゐだす。』

『明後日？』と、お定は目を睜つた。

『明後日！』と、お八重も目を睜つた。

二人は暫し互ひの顔を打瞞つてゐたが、『でや、明日盛岡さ行がねばならねえな。』とお定が先づ我に歸つた。

『然うだす。そして今夜のうちに、衣服だの何包んで、權作老爺頼まねばならねえす。』

『だらハア、今夜すか？』と、お定は又目を睜つた。

左う右うしてゐるうちに、一人二人と他の水汲が集つて來たので、

二人はまだ何か密々ひそくと語り合つてゐたが、聽て滿々なみくと水を汲んで擔ぎ上げた。そして、すぐ二三軒先の權作が家へ行つて、

『老爺おやぢア起きたすか?』と、表から聲をかけた。

『何時まで寢てるべえせア。』と、中から胴間聲どまごゑがする。

二人は目を見合して、ニツコリ笑つたが、桶を下して入つて行つた。馬車追ひきの老爺は丁度厩の前で乾秣やたを刻むところであつた。

『明日あした盛岡さ行くすか?』

『明日がえ? 行くどもせア。權作ア此老年としになるだが、馬車曳ふつぱらねえでヤ、腹減つて斃死くたばるだあよ。』

『だら、少許すこし持つてつて貰ひてえ物が有るがな。』

『何程なんぼでも可えだ。明日けえア歸り荷にだで、行く時ときア空馬車曳ふつぱつ

て行くのだもの。』

『其そんなに澤山たんとでも無えす。俺等おらも明日盛岡あしたさ行くども、手さ持つ

てげば邪魔まじです。』

『そんだら、ハア、お前達まへたちも馬車ばしやさ乗つてつたら可えがべせア。』

二人は又目を見合して、二言三言しめ喋しめし合つてゐたが、

『でア老爺おやぢな、俺等おらも乗せでつて貰もらふす。』

『然さうして御座ごぜえ。唯ただ、巢子すごの掛茶屋かぢやさ行つたら、盛切酒もつきりざけ一杯ぺえ

買かふだアぜ。』

『買かふともす。』と、お八重は晴やかに笑つた。

『お定さだツ子こも行くえのがえ？』

お定は一寸狼狽うろたへてお八重の顔を見た。お八重は又笑つて、

『一人だば淋しだで、お定さんにも行つて貰ふべがと思つてす。』
 『ハア、俺ア老としより人だで可えが、黒馬あをの奴ア怠てえくつ屈しねえで喜ぶ
 でヤ。だら、明日あしたア早く來て御座ごぜえ。』

此日は、二人にとつて此上もない忙がしい日であつた。お定は
 水汲から歸ると直ぐ朝草刈に平へいたの田野へ行つたが、莫迦まがに氣がそは
 くして、朝露に濡れた利鎌とがまが、兎角休み勝になる。離れ／＼
 の松の樹が、山の端に登つた許りの朝日に、長い影を草の上に投
 げて、葉毎に珠を綴つた無数の露の美しさ。秋草の香が初はつたけ簞たけの
 香を交へて、深くも胸の底に沁みる。利鎌の動く毎に、サツサツ
 と音して寝る草には、萎す枯がれた桔梗の花もあつた。お定は胸に往

來する取留もなき思ひに、黒味勝の眼が曇つたり晴れたり、一背負だけ刈るに、例いっもより餘程長くかつた。

朝草を刈つて來てから、馬の手入を濟ませて、朝餉を了へたが、十坪許り刈り残してある山手の畑へ、父と弟と三人で粟刈に行つた。それも午前には刈り了へて、弟と共に黒馬あをと栗毛の二頭で家の裏へ運んで了つた。

母は裏の物置の側に荒蓆を布いて、日向ぼっこをしながら、打残しの麻絲うを砑うつてゐる。三時頃には父も田りから歸つて來て、厩やの前の乾秣た場で、鼻唄ながらに鉋や鎌を研ぎ始めた。お定は唯もう氣がそはくして、別に東京の事を思ふでもなく、明日の別れを悲むでもない、唯何といふ事なくそはくしてゐた。裁縫も

手につかず、坐つても居られず、立つても居られぬ。

大工の家へ裏傳ひにゆくと、恰度お八重一人ゐた所であつたが、もう風呂敷包が二つ出来上つて、押入れの隅に隠したあつた。其處へ源助が来て、明後日の夕方までに盛岡の、停車場前の、松本といふ宿屋に着くから、其處へ訪ねて一緒になるといふ事に話をきめた。

それからお八重と二人家へ歸ると、父はもう鉞鎌を研ぎ上げた
と見えて、薄暗い爐邊ろばたに一人踏込んで、莨を吹かしてゐる。

『父爺おやぢや。』とお定は呼んだ。

『何しや？』

『明日盛岡さ行つても可えが？』
あした

『お八重ツ子どがえ？』

『然うしや。』

『八幡様のお祭禮まつりにや、まだ十日もあるべえどら。』

『八幡様までにや、稻刈が始るべえな。』

『何しに行ぐだあ？』

『お八重さんが千太郎さま宅とこさ用あつて行くで、俺も伴つれてぐ言

ふでせア。』

『可えがべす、老爺おやぢな。』とお八重も喙を容れた。

『小遣錢こづけえあるがえ？』

『少許すこしだばあるども、呉けえらば呉けえで御座え。』

『まだお八重ツ子から、御馳走ごちようになるべな。』

と言つて、定次郎は腹掛から五十錢銀貨一枚出して、あがりがまち上に 櫃にに腰かけてゐるお定へ投げてよこした。

お八重はチラとお定の顔を見て、首尾よしと許り笑つたが、お定は父の露疑はぬ様を見て、おとな温しい娘だけに胸が迫つた。さしぐんで來る涙を見せまいと、ツイと立つて裏口へ行つた。

五

夕方、一寸でも他よそ所ながら暇乞に、學校の藤田を訪ねようと思つたが、其暇もなく、農家の常とて夕餉は日が暮れてから濟ましたきものが、お定は明日着て行く衣服を疊み直して置くと云つて、手ラ

ンプを持つた儘、寢室にしてゐる四疊半許りの板敷に入つた。間もなくお八重が訪ねて来て、さり氣ない顔をして入つたが、

『明日着て行く衣服きものすか?』と、態わざと大きい聲で言つた。

『然うす。明日着て行くで、疊み直してゐるす。』と、お定も態わざと高く答えて、二人目を見合せて笑つた。

お八重は、もう全すつかりしたく然準備が出来たといふ事で、今其風呂敷包は三つとも持出して来たが、此家こゝの入口の暗い土間に隠して置いて入つたと言ふ事であつた。で、お定も急がしく萌黄の大風呂敷を擴げて、手てりの物を集め出したが、衣服といつてたつた雌六七枚、帯も二筋、娘心には色々と不満があつて、この袷あはは少し老ふけてゐるとか、此袖口が餘り開き過ぎてゐるとか、密々ひそ話に小一時間も

かゝつて、漸々準備が出来た。

父も母もまだ爐邊ろばたに起きてるので、もう少し待つてから持出さうと、お八重は言ひ出したが、お定は些ちと躊躇してから、立つと明あかりとりの煤けた櫛れんじ子に手をかけると、端の方三本許り、格子が何の事もなく取れた。それを見たお八重は、お定の肩を叩いて、

『この人しとアまあ、可え工夫してのごど。』と笑つた。お定も心持顔を赧くして笑つたが、風呂敷包は、難なく其處から戸外へ吊り下された。格子は元の通りに直された。

二人はそれから權作老爺の許へ行つて、二人前の風呂敷包を預けたが、戸外の冷やかな夜風が、耳を聳する許りな蟲の聲を漂はせて、今夜限り此生れ故郷を逃げ出すべき二人の娘にいう許りな

い心悲しい感情を起させた。所々降つて來さうな秋の星、八日許りの片割月が浮雲の端に澄み切つて、村は家並の屋根が黒く、中央程の郵便局の軒燈のみ淋しく遠く光つてゐる。二人は、何といふ事もなく、もう濕聲うるみこゑになつて、片々に語りながら、他所ながらも家々に別れを告げようと、五六町しかない村を、南から北へ、北から南へ、幾度となく手を取合つて吟行さまようた。路で逢ふ人には、何日いつになく忸々なれくしく此方こつちから優しい聲を懸けた。作右衛門店にも寄つて、お八重は※※はんけちを二枚買つて、一枚はお定に呉れた。何處ともない笑聲、子供の泣く聲もする。とある居酒屋の入口からは、火光あかりまぶしが眩く洩れて、街路を横さまに白い線を引いてゐたが、蟲の音も憚おそからぬ酔うた濁聲だみごゑが、時々けたゝましい其店

の嬢の笑聲を伴つて、喧嘩でもあるかの様に一町先までも聞える。二人は其騒々しい聲すらも、なつかしさうに立止つて聞いてゐた。それでも、二時間も歩いてるうちには、氣の紛れる話もあつて、お八重に別れてスタスタと家路に歸るお定の眼にはに、もう涙が滲んでゐず、胸の中では、東京に着いてから手紙を寄越すべき人をを彼^{あれこれ}是と數へてゐた。此村^{こゝ}から東京へ百四十五里、其^{そんな}事は知らぬ。東京は仙臺といふ所より遠いか近いかわそれも知らぬ。唯明日は東京にゆくのだと許り考へてゐる。

枕に就くと、今日位身體も心も急がしかつた事がない様な氣がして、それでも何となく物足らぬ様な、心悲^{うれ}しい様な、恍乎^{ぼうつ}とした疲心地^{つかれごゝち}で、すぐうとくと眠つて了た。

ふと目が覺めると、消すを忘れて眠つた枕邊まくらもとの手ランプの影に、何處から入つて來たか、蟋蟀こほろぎが二匹、可憐な羽を顫はして啼いてゐる。遠くで若者が吹く笛の音のする所から見れば、まだ左程夜が更けてもぬらしい。

と櫺子れんじの外にコツコツと格子を叩く音がする。あ之で目が覺めたのだなと思つて、お定は直ぐ起上つて、密りこつそと格子を脱はづした。丑之助が身輕みがるに入つて了つた。

手ランプを消して、一時間許り經つと、丑之助がもう歸準備かへりじたくをするので、これも今夜限きりだと思ふとお定は急に愛惜の情が喉に塞つて來て、熱い涙が瀧の如く溢れた。別に丑之助に未練を残す

でも何でもないが、唯もう悲さが一時に胸を充たしたので、お定は矢庭に両手で力の限り男を抱擁だきしめた。男は暗の中にも、遂ぞ無い事なので吃驚びっくりして、目を圓くもしてゐたが、やがてお定は忍び音で歔歔すくりなきし始めた。

丑之助は何の事とも解りかねた。或は此お定ツ子が自分に惚れたのぢやないかとも思つたが、何しろ餘り突然なので、唯目を圓くするのみだつた。

『怎どうしたけな?』と囁いてみたが返事がなくて一層歔歔すくりなきく。と、平常ふだんから此女の温おとなしく優しかつたのが、俄かに可憐いじらしくなつて來て、丑之助は又、

『怎ほんしたけな、眞まことに?』と繰返した。『俺ア何が悪い事でもした

「げえ？」

お定は男の胸に密びつたり接と顔を推着おしつけた儘で、強く頭を振つた。男はもう無性にお定が可憐いぢらしなくなつて、

『だから怎どうしたゞよ？ 俺ア此頃少し急しくて四日よ許り來ねえでたのを、汝うなア憤おこつたのげえ？』

『嘘うそだ！』とお定は囁く。

『嘘でねえでヤ。俺ア眞實ほんとに、汝うなアせえ承知して呉けえれば、夫いつし婦よになりてえど思つてるのに。』

『嘘だ！』とお定はまた繰返して、一層強く男の胸に顔を埋めた。暫すくりにしは女の歔歔すくりにく聲のみ聞えてゐたが、丑之助は、其漸く間斷とぎ々々れくになるのを待つて、

『汝うなア頬ほつ片ぺた、何時來ても天鷲びろうど絨じゆみてえだな。十四五の娘めらしこ子こと寝る様だ。』と言つた。これは此若者が、殆んど來る毎にお定に言つてゆく讚辭ことばなので。

『十四五の娘めらしやど子供ども寝でるだべせア。』とお定は鼻をつまらせ乍ら言つた。男は、女の機嫌の稍直つたのを見て、

『嘘だあでヤ。俺ア、酒でも飲んだ時ア他ほかの女子えさも行くども、其そんなに浮氣うきばしてねえでヤ。』

お定は胸の中で、此丑之助にだけは東京行の話をして可からうと思つて見たが、それではお八重に濟まぬ。といつて、此儘何も言はずに別れるのも殘惜しい。さて怎どうしたものだらうと頻りに先刻さつきから考へてゐるのだが、これぞといふ決斷もつかぬ。

『丑さん。』稍あつてから囁いた。

『何しや?』

『俺あしたア明日……』

『明日? 明日の晩も来るせえ。』

『そでねえだ。』

『だら何しや?』

『明日俺あしたおれア、盛岡さ行つて来るす。』

『何しにせや?』

『お八重さんが千太郎さん許とこさ行くで、一緒に行つて来るす。』

『然さうが、八重ツ子ア今こんにや夜、何とも言はながつけえな。』

『だらお前、今こんにや夜もお八重さんさ行つて来たな?』

『然うだねえでヤ。』と言つたが、男は少し狼狽うろたへた。

『だら何時逢いづつたす?』

『何時ツて、八時頃にせ。ホラ、あのお芳ツ子の許とこの店でせえ。』

『嘘うそだす、此このしと人ア。』

『怎どうしてせえ?』と益々狼狽うろたへる。

『怎かしても怎かうしても、今こんにやひ夜日ヤ暮れツとがら、俺アお八重さ

んと許ばり歩いてだもの。』

『だつて。』と言つて、男はクスクス笑ひ出した。

『ホレ見らせえ!』と女は稍聲高く言つたが、別に怒つたでもない。

『明日あした汽車で行くだか?』

『權作老爺おやぢの荷馬車で行くで。』

『だら、朝早かべせえ。』と言つたが、『小遣錢こづげえけ呉えべがな？

ドラ、手ランプてんらんぷ點つけろでヤ。』

お定が黙つてゐたので、丑之助は自分で手探りに燐寸マツチを擦つて手ランプに移すと、其處に脱捨てゝある襯衣かくしの衣囊から財布を出して、一圓紙幣を一枚女の枕の下に入れた。女は手ランプを消して、

『餘計よげえだす。』

『餘計な事ア無ねえせア。もつと有るものせえ。』

お定は、平常いづもならば恁こんな事を餘り快く思はぬのだが、常々添寢した男から東京行の錢別を貰つたと思ふと、何となく嬉しい。お

八重には恚 事が無からうなど、考へた。

先刻さつきの蟋蟀こほろぎが、まだ何處か室の隅ツこに居て、時々思出した様に、哀れな音を立てゝゐた。此夜お定は、怎どうしても男を抱擁めた手を弛ゆるめず、夜明近い鶏の頻りに啼立てるまで、厩の馬の鬣を振ふ音や、ゴトゴト破目板を蹴る音を聞きながら、これといふ話もなかつたけれど、丑之助を歸してやらなかつた。

六

其翌朝は、グツスリ寢込んでゐる所をお八重に起されて、眠い眼を擦こすりく、麥八分の冷飯に水を打懸けて、形許り飯を濟まし、

起きたばかりの父母や弟に簡単な挨拶をして、村端れ近い權作の家の前へ來ると、方々から一人二人水汲の女共が、何れも眠相な眼をして出て來た。荷馬車はもう準備が出来てゐて、權作は鼻に何やら口小言を言ひながら、脚の太い黒馬あをを曳き出して來て馬車に繋いでゐた。

『何處へ』と問ふ水汲共には『盛岡へ』と答へた。二人は荷馬車に布いた莫塵の上に、後向になつて行儀よく坐つた。傍には風呂敷包。馬車の上で髪を結つて行くといふので、お八重は別に櫛やら油やら懷中鏡やらの小さい包みまがを持つて來た。二人共木綿物ではあるが、新しい八丈擬まがひの縞の袴あをを着てゐた。

馳あをて權作は、ピシヤリと黒馬あをの尻を叩いて、『ハイハイ』と言

ひながら、自分も場車に飛乗った。馬は白い息を吐きながら、南を向けて歩き出した。

二人は、まだ頭腦あたまの中が全すつかり然覺めきらぬ様で、呆然ぼんやりとして、段々後ろに遠ざかる村の方を見てゐたが、道路の兩側はまだ左程古くない松並木、曉の冷さが爽かな松風に流れて、叢の蟲の音は細い。一町許り來た時、村端れの水汲場の前に、白手拭を下げた男の姿が見えた。それは、毎朝其處に顔洗ひに來る藤田であつた。お定は膝の上に握つてゐた新しい※※はんけちを取るより早く、少し伸び上つてそれを振つた。藤田は立止つて凝然じつと此方こつちを見てゐる様だつたが、下げてゐた手拭を上げたと思ふ間に、道路は少し曲つて、並木の松に隠れた。と、お定は今の素振そぶりを、お八重が何と見たか

と氣がついて、心うらはづ羞かしさと落がっかり膽した心地でお八重の顔を見ると、其美しい眼には涙が浮んでゐた。それを見ると、お定の眼にも遽かに涙が湧いて來た。

盛岡へ五里を古い新しい松並木、何本あるか數へた人はない。

二人が髪を結つて了ふまでに二里過ぎた。あとの三里は權作の無駄口と、二人が稚い時の追おもひでばなし憶談。

理とこや髮師の源助さんは、四年振で突然村に來て、七日の間くわんたい驩待された。そして七日の間東京の繁華な話を繰返した。

村の人達は異様な印象を享けて一同多少づつ羨望の情を起した。もう四五日も居たなら、お八重お定と同じ志願を起す者が、三人

も五人も出たかも知れぬ。源助さんは満腹の得意を以て、東京見物に來たら必ず自分の家に寄れといふ言葉を人毎に残して、七日目の午後此村を辭した。好摩かうまのステーションから四十分、盛岡に着くと、約の如く松本といふ宿屋に投じた。

不取敢湯とりあへずに入つてると、お八重お定が訪ねて來た。一緒に晩め餐しを了へて、明日の朝は一番汽車だからといふので、其晩二人も其宿屋に泊る事にした。

源助は、唯一本の銚子に一時間も費かりながら、東京へ行つてからの事——言語ことばを可なるべく成あ早く改あらためねばならぬとか、二人がまだ見た事のない電車への乗方とか、掏摸すりに氣を付けねばならぬとか、種いろく々な事を詳くく喋しゃべつて聞かして、九時頃に寝る事になつた。八

疊間に寢具が三つ、二人は何れへ寢たものかと立つてみると、源助は中央まんなかの床へ潜り込んで了つた。仕方がないので二人は右と左に離れて寢たが、夜中になつてお定が一寸目を覺ました時は、細めて置いた筈の、自分の枕まくらもと邊あつちの洋燈ランプが消えてゐて、源助のはいびぎが、怎どうやら疊三疊許り彼方あつちに聞えてゐた。

翌朝は二人共源助に呼起されて、髪を結ふも朝飯を食ふも夙そく卒さに、五時發の上り一番汽車に乗つた。

七

途中で機關車に故障があつた爲、三人を乗せた汽車が上野に着

いた時は、其日の夜の七時過であつた。長い長いプラットホォー
ム、潮の様な人、お八重もお定も唯小さくなつて源助の兩袂に縋
つた儘、やうく漸々の思で改札口から吐出されると、何百輛とも數知
れず列んだ腕車、廣場の彼方は晝を欺く滿街の燈火、お定はもう
之だけで氣を失ふ位おッ魂消て了つた。たまげ

くるま腕車が三輛、源助にお定にお八重といふ順で驅け出した。お定
は生れて初めて腕車に乗つた。まだ見た事のない夢を見てゐる様
な心地で、東京もなければ村もない、自分といふものも何處へ行
つたやら、在るものは前の腕車に源助の後姿許り。唯 ほんやり乎とし
て了つて、別に街々の賑ひを仔細に見るでもなかつた。燦爛たる
火光、あかり千萬の物音を合せた様な轟々たる都の響、其火光がお定を

溶かして了ひさうだ。其響がお定を押潰して了ひさうだ。お定は唯もう膝の上に載せた萌黄の風呂敷包を、生命よりも大事に抱いて、胸の動悸を聽いてみた。四邊あたりを數限りなき美しい人立派な人が通る様だ。高い高い家もあつた様だ。

少し暗い所へ來て、ホツと息を吐いた時は、腕車がちやうど恰度本郷四丁目から左に曲つて、菊坂町に入つた所であつた。お定は一寸振返つてお八重を見た。

纏て腕車が止つて、『山田理髮店』と看板を出した明るい家の前。源助に促されて硝子戸の中に入ると、目が眩む程明るくて、壁に列んだ幾面の大鏡、洋燈ランプが幾つも幾つもある。白い物を着た職人が幾人も幾人もある。何れが實際の人で何れが鏡の中の人

なやら、見分もつかぬうちに、また源助に促されて、其店の片隅から疊を布いた所に上つた。

上つたは可いいが、何處に坐れば可いのか一寸周章あわてて了つて、二人は暫し其所に立つてゐた。源助は、

『東京は流石に暑い。腕車くるまの上で汗が出たから喃。』と言つて突い然きなり羽織を脱いで投げようとすると、三十六七の小作りこづくな内儀おかみさんらしい人がそれを受取つた。

『怎どうだ、俺の留守中何も變りはなかつたかえ？』

『別に。』

源助は、長火鉢の彼方あつちへドツカと胡坐あぐらをかいて、

『さあく、お前さん達もお坐すわんなさい。さあ、ずっと此方こつちへ。』

『さあ、何卒。』と内儀さんも言つて、不思議相に二人を見た。

二人は人形のように其處に坐つた。お八重が叩頭をしたので、お定も遅れじと眞似をした。源助は、

『お吉や、この娘さん達はな、そら俺がよく話した南部の村の、以前非常い事世話になつた家の娘さん達でな。今度は非東京へ出て一二年奉公して見たいといふので、一緒に出て來た次第だがね。これは俺の鼻ですよ。』と二人を見る。

『まあ然うですか。些とお手紙にも其事があつたつて、新太郎が言つてましたがね。お前さん達、まあ遠い所をよくお出になつたことねえ。眞に。』

『何卒ハア……』と、二人は血を吐く思で漸く言つて、温しく頭

を下げた。

『それにな、今度七日遊んでるうち、此方の此お八重さんといふ人の家に厄介になつて來たんだよ。』

『おや然う。まあ甚どんなにか宅ぢや御世話様になりましたか、眞ほんに遠い所をよく入いらつしや來つた。まあくお二人共自分の家へ來た積りで、緩ゆつくり見物でもなさいましよ。』

お定は此時、些ちつとも氣が附かずに何もお土産を持つて來なかつたことを思つて、一人胸を痛めた。

お吉は小作りなキリリとした顔立の女で、二人の田舎娘には見た事もない程立居振舞が敏すばしこ捷い。黒縹子の半襟をかけた唐たうざん棧の袷を着てゐた。

二人は、それから名前や年齢としやお吉に訊きかれたが、大抵源助が引取つて返事をして呉れた。負けぬ氣のお八重さへも、何か喉のどに塞つまつた様で、一言も口へ出ぬ。況ましてお定は、これから、怎どうして那あんぢめら滑なかな言葉を習つたもんだらうと、心細くなつて、お吉の顔が自分等の方に向くと、また何か問はれる事と氣が氣でない。

『阿父様おとつあん、お歸んなさい。』と言つて、源助の一人息子の新太

郎も入つて來た。二人にも挨拶して、六年許り前に一度お定らの村に行つた事があるところから、色々と話を出す。二人は又之の應うけこたへ答こたへに困らせられた。新太郎は六年前の面影が殆ど無く、今はもう二十四五の立派な男、父に似ず背が高くて、キリリと角帶を結んだ恰好の好き。髪は綺麗に分けてゐて、鼻が高く、色だけ

は昔ながらに白い。

一體、源助は以前静岡在の生れであるが、新太郎が二歳ふたつの年に飄然ぶらりと家出して、東京から仙臺盛岡、其盛岡に居た時、恰も白井家の親類な酒造家の隣家の理髮店とこやにゐたものだから、世話する人あつてお定らの村に行つてゐたので、父親に死なれて郷里に歸ると間もなく、目の見えぬ母とお吉と新太郎を連れて、些いささか少の家屋敷を賣拂ひ、東京に出たのであつた。其母親は去年の暮に死んで了つたので。

お茶も出された。二人が見た事もないお菓子も出された。

源助とお吉との會話が、今度死んだ函館の伯父の事、其葬式の事、後に残つた家族共の事に移ると、石の様に堅くなつてるので、

お定が足に痲痺しびれがきれて来て、膝ひざ頭がしらが疼うづく。泣きたくなるのを漸やうくく辛抱して、凝ぢつと疊の目を見てゐる辛さ。九時半頃になつて、漸々『疲れてゐるだらうから』と、裏二階の六疊へ連れて行かれた。立つ時は足に感覺がなくなつてゐて、危く前に仆のめらうとしたのを、これもフラフラしたお八重に抱きついて、互ひに辛さうな笑ひを洩らした。

風呂敷包を持つて裏二階に上ると、お吉は二人前の蒲團を運んで来て、手早く延べて呉れた。そして狭い床の間に些ちよつと腰掛けて、三言四言お愛想を言つて降りて行つた。

二人限きりになると、何れも吻ほっと息を吐いて、今し方お吉の腰掛けた床の間に膝をすれきくりに腰掛けた。かくて十分許りの間、田舎

言葉で密々こそく話合つた。お土産を持つて來なかつた失策しくじりは、お八重も矢張氣がついてゐた。二人の話は、源助さんも親切だが、お吉も亦、氣の隔おけぬ親切な人だといふ事に一致した。郷里くにの事は二人共何にも言はなかつた。

訝をかしい事には、此時お定の方が多く語つた事で、阿婆摺あばづれと謂はれた程のお八重は、始しよつちゆう終受身に許りなつて口寡くちすくなにのみ應う答けこたへしてゐた。枕についたが、二人とも仲々眠られぬ。さればといつて、別に話すでもなく、細めた洋燈ランプの光に、互ひの顔を見ては温をとなしく微笑ほゑみを交換かはしてゐた。

翌朝は、枕邊の障子が白み初めた許りの時に、お定が先づ目を覺ました。嗚呼東京に來たのだつけと思ふと、昨晚ゆうべの足の麻痺しびれが思出される。で、膝頭を伸ばしたり屈かめたりして見たが、もう何ともない。階下したではまだ起きた氣色けはひがない。世の中が森と沈まり返つてゐて、腕車くるまの上から見た雜沓が、何處かへ消えて了つた様な氣もする。不圖、もう水汲に行かねばならぬと考へたが、否、此處は東京だつたと思つて幽かに笑つた。それから二三分の間は、東京ぢや怎どうして水を汲むだらうと云ふ様な事を考へてゐたが、お八重が寢返りをして此方へ顔を向けた。何夢を見てゐるのか、眉と眉の間に皺寄せて苦し相に息をする。お定はそれを見ると直ぐ

起き出して、聲低くお八重を呼び起した。

お八重は、深く息を吸つて、パツチリと目を開けて、お定の顔を怪訝相けげんさうにみてゐたが、

『ア、家えに居えだのでやなかつたけな。』と言つて、ムクリと身起した。それでもまだ得心がいかぬといった様に周圍あたりを見　してゐたが、

『お定さん、俺おれア今夢見て居えだつけおんす。』と甘える様な口調。
『家えの方のすか？』

『家の方のす。ああ、可怖おっかながつた。』と、お定の膝に投げる様に身を恠もたせて、片手を肩にかけた。

其夢といふのは恠かうで。——村で誰か死んだ。誰が死んだのか

解らぬが、何でも老人だつた様だ。そして其葬式が村役場から出た。男も女も、村中の人皆野送の列に加つたが、巡査が劍の柄に手をかけながら、『物を言ふな、物を言ふな。』と言つてゐた。北の村端から東に折れると、一町半の寺道、其半ば位まで行つた時には、野送の人が男許り、然も皆洋服を着たり紋付を着たりして、立派な帽子を冠つた髭の生えた人達許りで、其中に自分だけが腕車の上に縛られてゆくのであつたが、甚どんな人が其腕車くるまを曳いたのか解らぬ。杉の木の下を通つて、寺の庭で三遍　つて、本堂に入ると、棺桶の中から何ともいへぬ綺麗な服装をした、美しいお姫様の様な人が出て中央まんなかに坐つた。自分も男達と共に坐ると、『お前は女だから。』と言つて、ずっと前の方へ出された。見た

事もない小僧達が奥の方から澤山出て来て、鏡ねうや太鼓を鳴らし始めた。それは喇叭節の節であつた。と、例いつもの和尚様が拂子ほつすを持つて出て来て、綺麗なお姫様の前へ行つて叩頭おしぎをしたと思ふと、自分の方へ歩いて来た。高い足駄を穿いてゐる。そして自分の前に突つ立つて、『お八重、お前はあのお姫様の代りにお墓に入るのだぞ。』と言つた。すると何時の間にか源助さんが側に來てゐて、自分の耳に口をあてて『厭だと言へ、厭だと言へ。』と教へて呉れた。で、『厭だす。』と言つて横を向くと、（此時寢返りしたのだらう。）和尚様が　つて来て、鬚の無い顎に手をやつて、丁度鬚を撫で下げる様な具合にすると、赤い／＼血の様な鬚が、延びたく／＼臍のあたりまで延びた。そして、眼を皿の様に大きくし

て、『これでもか?』と怒鳴つた。其時目が覺めた。

お八重がこれを語り終つてから、二人は何だか氣味が悪くなつて來て、暫時しばらく意味あり氣に目と目を見合せてゐたが、何方どっちでも胸に思ふ事は口に出さなかつた。左さう右かうしてゐるうちに、階下したでは源助が大きなあくび曖をする聲がして、聽てお吉が何か言ふ。五分許り過ぎて誰やら起きた様なけはひ氣色がしたので、二人も立つて帶を締めた。で、蒲團を疊まうとしてが、お八重は、

『お定さん、昨晩ゆべな持つて來た時、此蒲團おもてどア表出して疊まさつて
らけすか、裏出して疊まさつてらけすか?』と言ひ出した。

『さあ、何方どつちだたべす。』

『何方だたべな。』

『困つたな。』

『困つたなす。』と、二人は暫時しばらく、呆然ぼんやり立つて目を見合せてゐたが、

『表なやうだつけな。』とお八重。

『表だつたべすか。』

『そだつけ。』

『そだたべすか。』

聽て二人は蒲團を疊んで、室の隅に積み重ねたが、恚こんなに早く階下したに行つて可いものか怎どうか解らぬ。怎しよと相談した結果、兎も角も少し待つて見る事にして、室の中央まんなかに立つた儘四邊あたりを見した。

『お定さん、細え柱だなす。』と大工の娘。奈何様いかさま、太い材木を不體裁に組立てた南部の田舎の家に育つた者の目には、東京の家は地震でも揺れたら危い位、柱でも鴨居でも細く見える。

『眞ほんにせえ。』とお定も言つた。

で、昨晚ゆうべ見た階下の様子を思出して見ても、此室の疊の古い事、壁紙の所々裂けた事、天井が手の届く程低い事などを考へ合せて見ても、源助の家は、二人及び村の大抵の人の想像した如く、左程立派でなかつた。二人はまた其事を語つてゐたが、お八重が不圖、五尺の床の間にかけてある。縁日物の七福神の掛物を指さして、

『あれア何だか知おべだすか？』

『惠比須大黒だべす。』

二人は床の間に腰掛けたが、

『お定さん、これア何だす?』と圖の人を指さす。

『槌持つてるもの、大黒様だべアすか。』

『此方ア?』

『惠比須だす。』

『すたら、これア何だす?』

『布袋ほていさま様す、腹ア出てるもの。あれ、忠太おやぢ老爺に似たぜ。』と

言ふや、二人は其忠太の恐ろしく肥つた腹を思出して、口に袂をあてた儘、暫しは子供の如く笑ひ續けてゐた。

階下したでは裏口の戸を開ける音や、鍋の音がしたので、お八重が

先に立つて階段を降りた。お吉はそれと見て、

『まあ早いことお前さん達は、まだく寝やすんでらつしやれば可いのに。』と笑顔を作つた。二人は勝手への隔へだての敷居に両手を突い

て、『お早エなつす。』を口の中だけに言つて、挨拶をすると、

お吉は可笑しさに些ちよつと横向いて笑つたが、

『怎もお早う。』と晴やかに言ふ。

よく眠れたかとか、郷里くにの夢を見なかつたかとか、お吉は昨晩ゆうべよりもズツト忸々なれしく種々いろくな事を言つてくれたが、

『お前さん達のお郷里くにぢや水道はまだ無いでせう?』

二人は目を見合せた。水道とは何の事やら、其話は源助からも聞いた記憶おぼえがない。何と返事をして可いいか困つてると、

『何でも一通り東京の事知つてなくちや、御奉公に上つても困るから、私と一緒に入來しやい。教へて上げますから。』と、お吉は手桶を持つて下り立つた。『ハ。』と答へて、二人とも急いで店から自分達の下駄を持つて來て、裏に出ると、お吉はもう五六間先方へ行つて立つてゐる。

何の事はない、郵便函の小さい様なものが立つてゐて、四邊の土が水に濡れてゐる。

『これが水道ツて言ふんですよ。可ござんすか。それで恁うすると水が幾何でも出て來ます。』とお吉は笑ひながら栓を捻つた。途端に、水がゴウと出る。

『やあ。』とお八重は思はず驚きの聲を出したので、すぐに羞か

しくなつて、顔を火の様にした。お定も口にこそ出さなかつたが、同じ『やあ。』が喉元まで出かけたつたので、これも顔を紅くしたが、お吉は其中に一杯になつた桶と空からなのと取代へて、

『さあ、何方なり一つ此栓を捻ひねつて御覽なさい。』と宛さながら然小學校の先生が一年生に教へる様な調子。二人は目と目で互に譲り合つて、仲々手を出さぬので、

『些ちつとも怖い事はないんですよ。』とお吉は笑ふ。で、お八重が思切つて、妙な手つきで栓を力委せに捻ると、特別な仕掛がある譯ではないから水が直ぐ出た。お八重は何となく得意になつて、軽く聲を出して笑ひながらお定の顔を見た。

歸りはお吉の辭するも諾きかず、二人で桶を一つ宛づい軽々と持つて

勝手口まで運んだが、背後うしろからお吉が、

『まあお前さん達は力が強い事！』と笑つた。此の後に潜んだ意味などを察する程に、伶俐かしこいお定ではないので、何だか賞められた様な氣がして、密そつと口元に笑を含んだ。

それから、顔を洗へといはれて、急いで二階から淺黄の手拭やら櫛やらを持つて來たが、鏡は店に大きいのがあるからといはれて、怖るく種々いろくの光る立派な道具を飾り立てた店に行つて、二人は髪を結び出した。間もなく、表二階に泊つてる職人が起きて來て、二人を見ると、『お早う。』と聲をかけて妙な笑を浮べたが、二人は唯もうきまりが悪くて、顔を赤くして頭を垂れてゐる儘、鏡に寫る己が姿を見るさへも羞しく、堅くなつて卒そくに

髪を結つてゐたが、それでもお八重の方はチョイチョイ横目を使つて、職人の爲る事を見てゐた様であつた。

すべて恁こんな 具合で、朝餐あさめしも濟んだ。其朝餐の時は、同じ食卓

に源助夫婦と新さんとお八重お定の五人が向ひ合つたので、二人共三膳とは食へなかつた。此日は、源助が半月に餘る旅から歸つたので、それ／＼手土産を持つて知邊しるべの家を　らなければならぬから、お吉は家が明けられぬと言つて、見物は明日に決つた。

二人は、不器用な手つきで、食後の始末にも手傳ひ、二人限きりで水汲にも行つたが、其時お八重はもう、一度經驗があるので上級生の様な態度をして、

『流石は東京だでやなつす！』と言つた。

かくて此日一日は、殆んど裏二階の一室で暮らしたが、お吉は時々やつて来て、何呉となく女中奉公の心得を話してくれるのであつた。お定は生なまなか中禮儀などを守らず、つけつけ言つてくれる此女を、もう世の中に唯一人の頼りにして、嘗て自分等の村の役場に、盛岡から来てゐた事のある助役様の内儀おかみさんより親切な人だと考へてゐた。

お吉が二人に物言ふさまは、若し傍で見えてゐる人があつたなら、どんなに可笑をかしかつたか知れぬ。言葉を早く直さねばならぬと言つては、先づ短いのから稽古せよと、『かしこまりました。』とか『行つてらっしゃい。』とか、『お歸んなさい。』とか『左様さやでございますか。』とか、繰返し々々教へるのであつたが、二人は

胸の中でそれを擬まねて見るけれど、仲々お吉の様にはいかぬ。郷く里言葉の『然そだすか。』と『左様さいでございますか。』とは、第一長さが違ふ。二人には『で』に許り力が入つて、兎角『さいで、ございますか。』と二つに切れる。『さあ、一つ口ひとくちに出して行つて御覽なさいな。』とお吉に言はれると、二人共すぐ顔を染めては、『さあ』『さあ』と互ひに譲り合ふ。

それからお吉は、また二人が餘り温おとなしくして許りゐるので、店に行つて見るなり、少し街上おもてを歩いてみるなりしたら怎どうだと言つて、

『家の前から昨晚腕車ゆうべくるまで來た方へ少し行くと、本郷の通りへ出ますから、それはく賑かなもんですよ。其處の角には勸工場と云

つて何品なんでも賣る所があるし、右へ行くと三丁目の電車、左へ行くと赤門の前——赤門といへば大學の事ですよ、それ、日本一の學校、名前は聞いた事があるでせうさ。何なあに、大丈夫氣をつけてさへ歩けば、何處まで行つたつて迷兒まひごになんかなりやしませんよ。角の勸工場と家の看板さへ知つてりや。』と言つたが、『それ、家の看板には恁う書いてあつたでせう。』と人差指で疊に『山田』と覺束なく書いて見せた。『やまだと讀むんですよ。』二人は稍得意な笑顔をして頷き合つた。何故なれば、二人共尋常科だけは卒へたのだから、山の字も田の字も知つてゐたからなので。

それでも仲々階下したにさへ降り澁しぶつて、二人限きりになれば何やら密ひ

そく
 々話合つては、袂を口にあてて聲立てずに笑つてゐたが、夕方
 近くなつてから、お八重の發起で街路へ出て見た。成程大きなペ
 ンキ塗の看板には『山田理髪店』と書いてあつて、花の様なお菓
 子を飾つたお菓子屋と向ひあつてゐる。二人は右視とみかうみ左視して、此
 家忘れてなるものかと見　してると、理髪店の店からは四人の職
 人が皆二人の方を見て笑つてゐた。二人は交るゝに振返つては、
 もう何間歩いたか胸で計算しながら、二町許りで本郷館の前まで
 來た。

盛岡の肴町位だとお定の思つた菊坂町は、此處へ來て見ると宛ま
 然るで田舎の様だ。ああ東京の街！　右から左から、刻一刻に満さしひき干
 する人の潮！　三方から電車と人が崩なだれて來る三丁目の喧さはがしさ囂さ

は、宛さながら今にも戦が始りさうだ。お定はもう一步も前に進みかねた。

勸工場は、小さいながらも盛岡にもある。お八重は本郷館に入つて見ないかと言出したが、お定は『此次にすべす。』と言つて澁つた。で、お八重は決しかねて立つてゐると、車夫が寄つて来て、頻りに促す。二人は怖ろしくなつて、もと來た路を驅け出した。此時も背後うしろに笑わらひごゑ聲が聞えた。

第一日は斯くて暮れた。

九

第二日目は、お吉に伴れられて、朝八時頃から見物に出た。

先づ赤門、『恁こんな 學校にも教師せんせア居えべすか？』とお定は囁ささやいたが、

『居ゐるのす。』と答へたお八重はツンと濟してゐた。不忍の池では海の様だと思つた。お定の村には山と川と田と畑としか無かつたので。さて上野の森、話に聞いた銅像よりも、木立の中の大佛の方が立派に見えた。電車といふものに初めて乗せられて、淺草は人の塵溜、玉乗に汗を握り、水族館の地下室では、源助の話を思出して帯の間の財布を上から抑へた。人の數が掏摸に見える。凌雲閣には餘り高いのに怖氣おどけ立つて、到頭上らず。吾妻橋に出ては、東京では川まで大きいと思つた。兩國の川開きの話をお吉に聞かされたが、甚どんなこと 事をするものやら遂に解しまらず了しまひ。上潮

に末廣の長い尾を曳く川蒸汽は、仲々異いなものであつた。銀座の通り、新橋のステーション、勸工場にも幾度か入つた。二重橋は天子様の御門と聞いて叩頭おしぎをした。日比谷の公園では、立派な若い男と女が手をとり合つて歩いてるのに驚いた。

須田町の乗換に方角を忘れて、今来た方へ引返すのだと許り思つてゐるうちに、本郷三丁目に來て降りるのだといふ。お定はもう日が暮れかかつてるのに、まだ引張り　されるのかと氣が氣でなくなつたが、一町と歩かずに本郷館の横へ曲つた時には、東京の道路は訝をかしいものだと思へた。

理髮店に歸ると、源助は黒い額に青筋立てて、長火鉢の彼方あつちに怒鳴つてゐた。其前には十七許りの職人が平蜘蛛ひらくもの如く匍うづくまつてゐ

る。此間から見えなかつた斬髮機バリカンが一挺、此職人が何處かに隠し込んで置いたのを見附かつたとかで、お定は二階の風呂敷包が氣になつた。

二人はもう、身體も心も綿の如く疲れきつてゐて、晝頃何處やらで蕎麥を一杯宛食つただけなのに、燈火あかりがついて飯になると、唯一膳の飯を辛やつと喉を通した。頭腦あたまは乎ぼうつとしてゐて、これといふ考へも浮ばぬ。話も興がない。耳の底には、まだ轟々たる都の轟きが鳴つてゐる。

幸ひ好い奉公の口があつたが、先づ四五日は緩ゆつくり遊んだが可よからうといふ源助の話を書いて、二人は夕餐が濟むと間もなく二階に上つた。二人共『疲れた。』と許り、べたりと横に坐つて、話

もない。何處かしら非常に遠い所へ行つて來た様な心地である。淺草とか日比谷とかいふ語だけは、すぐ近間ちかくにある様だけれど、それを口に出すには遠くまで行つて來なげやならぬ様に思へる。一時間前まで見て來て色々の場所、あれもくと心では數へられるけれど、さて其景色は仲々眼に浮ばぬ。目を瞑ると轟々たる響。玉乗や、勸工場の大きな花瓶が、チラリ、チラリと心を掠かすめる。足下から鳩が飛んだりする。

お吉が、『電車ほど便利なものはない。』と言つた。然しお定には、電车程怖ろしいものはなかつた。線路を横切つた時の心地は、思出しても冷汗が流れる。後先を見　して、一町も向うから電車が來ようものなら、もう足が動かぬ、漸やつとそれを遣り過やし

て、十間も行つてから思切つて向側に驅ける。先づ安心と思ふと胸には動悸が高い。況まして乗つた時の窮屈きうくつさ。洋服着た男とでも肩が擦れくくなる、譯もなく身體が縮んで了つて、些ちよと首を動かすにも頸筋が痛い思ひ。停とまるかと思へば動き出す。動き出したかと思へば停る。しつきりなしの人の乗降のりおり、よくも間違が起らぬものと不思議に堪へなかつた。電車に一町乗るよりは、山路を三里素足はだしで歩いた方が遙まか優ましだ。

大都是其凄まじい轟々たる響きを以て、お定の心を壓した。然しお定は別に郷里に歸りたいとも思はなかつた。それかと言つて、東京が好なでもない。此處に居ようとも思はねば、居まいとも思はぬ。一刻の前をも忘れ、一刻の後をも忘れて、温おとなしいお定

は疲れてゐるのだ。ただ疲れてゐるのだ。

煎餅を盛つた小さい盆を持つて、上つて來たお吉は、明日お湯屋に伴^つれて行くと言つて下りて行つた。

九時前に二人は蒲團を延べた。

三日目は雨。

四日目は降りみ降らずみ。九月ももう二十日を過ぎたので、残暑の汗を洗ふ雨の糸を、初秋めいたうそ寒さが白く見せて、蕭々^{しとく}と廂^{ひさし}を濡らす音が、山中の村で聞くとは違つて、厭に陰氣な心を起させる。二人はつくねんとして相對した儘、言葉少なに郷里^{くに}の

事を思出してゐた。

おひる 午餐が済んで、二人がまだお吉と共に勝手にゐたうちに、二人の奉公口を世話してくれたといふ、源助と職業しごと仲間の男が来て、先さきさま様では一日も早くといふから、今日中に遣やる事にしたら怎どうだと言つた。

源助は、二人がまだ何も東京の事を知らぬからと言ふ様な事を言つてゐたが、お吉は、行つて見なけや何日までだつて慣れぬといふ其男の言葉に賛成した。

遂に行く事に決つた。

で、お吉は先づお八重、次にお定と、髪を銀杏返しに結つてくれたが、お定は、餘り前髪を大きく取つたと思つた、帯も締めて

貰つた。

三時頃になつて、お八重が先づ一人源助に伴ともなはれて出て行つた。お定は急に淋しくなつて七福神の床の間に腰かけて、小さい胸をひし轟と抱いた。眼には大きい涙が。

一時間許りで源助は歸つて來たが、先様の奥様はきやく淡白な人で、お八重を見るや否や、これぢや水道の水を半年もつかふと、大した美人になると言つた事などを語つた。

早目にばんめし晚餐を済まして、今度はお定の番。すぐ近い坂の上だといふ事で、風呂敷包を提げた儘、たそがれどき黄昏時の雨の霽間を源助の後につ跟いて行つたが、何と挨拶したら可いものかと胸を痛めながらしよんぼり悄然と歩いてゐた。源助は、先方でも眞の田舎者な事を御承

知なのだから、萬事間違のない様に奥様の言ふ事を聞けと繰返し教へて呉れた。

眞砂町のトある小路、右側に『小野』と記した軒燈の、とも點火り初めた許りの所へ行つて、『此の家だ。』と源助は入口の格子をあけた。お定は遂ぞ覚えぬ不安に打たれた。

源助は三十分許り経つと歸つて行つた。

竹筒臺の洋燈ランプが明るい。茶棚やら箆筒やら、時計やら、箆筒の上の立派な鏡臺やら、八疊の一室にありとある物は皆、お定に珍らしく立派なもので。黒柿の長火鉢の彼方に、二寸も厚い座蒲團に坐つた奥様の年は二十五六、口が少しへの字になつて鼻先が下

に曲つてるけれども、お定には唯立派な奥様に見えた。お定は洋燈の光に小さくなつて、石の如く坐つてゐた。

銀行に出る人と許り聞いて來たのであるが、お定は銀行の何ものなるも知らぬ。其旦那様はまだお歸りにならぬといふ事で、五^い歳許りの、眼のキヨロくした男の兒が、奥様の傍に横になつて、何やら繪のかいてある雑誌を見つゝ、時々不思議相にお定を見てゐた。

奥様は、源助を送り出すと、其儘手づから洋燈を持つて、家の中の部屋々々をお定に案内して呉れたのであつた。玄關の障子を開けると三疊、横に六疊間、奥が此八疊間、其奥にも一つ六疊間があつて主人夫婦の寢室になつてゐる。臺所の横は、お定の室と

名指された四疊の細長い室で、二階の八疊は主人の書齋である。

さて、奥様は、眞白な左の腕を見せて、長火鉢の縁ふちに臂ひぢを突き乍ら、お定のために明日からの日課となるべき事を細々と説くのであつた。何處の戸を一番先に開けて、何處の室の掃除は朝飯過で可いか。來客のある時の取次の仕方から、下駄靴の揃へ様、御用聞に來る小僧等への應對の仕方まで、艶のない聲に諄々と喋り續けるのであるが、お定には僅かに要領だけ聞きとれたに過ぎぬ。

其處へ旦那様がお歸りになると、奥様は座を譲つて、反對の側の、先刻まで源助の坐つた座蒲團に移つたが、

『貴郎あなた、今日は大層遅かつたぢやございませんか？』

『ああ、今日は重役の鈴木とこン許とこに つたもんだからな。(と言つ

てお定の顔を見てゐたが、）これか、今度の女中は？』

『ええ、先刻菊坂の理髮店とこやだつてのが伴れて來ましたの。（お定を向いて）此方が旦那様だから御挨拶しな』

『ハ。』と口の中で答へたお定は、先刻からもう其挨拶に困つて了つて、肩をすぼめて切ない思ひをしてゐたので、恚かういはれると忽ち火の様に赤くなつた。

『何卒どうかハ、お頼たのまを申します。』と、聞えぬ程に言つて、兩手を突く。旦那様は、三十の上を二つ三つ越した髭の嚴しい立派な人であつた。

『名前は？』

といふを冒頭はじめに、年も訊かれた、郷里も訊かれた、兩親のあるか

無いかも訊かれた。學校へ上つたか怎かも訊かれた。お定は言葉に窮つて了つて、一言言はれる毎に穴あらば入りたくなる。足が耐へられぬ程痲痺れて來た。

稍あつてから、『今晚は何もしなくても可いから、先刻教へたアノ洋燈をつけて、四疊に行つてお寢み。蒲團は其處の押入に入つてある筈だし、それから、まだ慣れぬうちは夜中に目をさまして便所にでもゆく時、戸惑ひしては不可から、洋燈は細めて危なくない所に置いたら可いだらう。』と言ふ許可が出て、奥様から燐寸を渡された時、お定は甚に嬉しかつたか知れぬ。

言はれた通りに四疊へ行くと、お定は先づ兩脚を延ばして、膝頭を軽く拳で叩いて見た。一方に障子二枚の明りとり、晝はさぞ

暗い事であらう。窓と反対の、奥の方の押入を開けると、蒲團もあれば枕もある。妙な臭氣が鼻を打った。

お定は其處に膝をついて、開けた襖に片手をかけた儘一時間許りも身動きをしなかつた。先づ明日の朝自分の爲^せねばならぬ事を胸に數へたが、お八重さんが今頃^{どう}怎してる事かと、友の身が思はれる。郷里^くを出て以來、片時も離れなかつた友と別れて、源助にもお吉にも離れて、ああ、自分は今初めて一人になつたと思ふと、温なしい娘心はもう涙ぐまれる。東京の女中！郷里^くで考へた時は何ともいへぬ華やかな楽しいものであつたに、……然^さういへば自分はまだ手紙も一本郷里へ出さぬ。と思ふと、兩親の顔や弟共の聲、馬の事、友達の事、草苺の事、水汲の事、生れ故郷が詳ら

かに思出されて、お定は凝ぢつと涙の目を押おし瞑つむつた儘、『阿あ母つぱあ、許してけろ。』と胸の中で繰返した。

左さう右かうしてゐるうちにも、神経が鋭くなつて、壁の彼方から聞える主人夫婦の聲に、若しや自分の事を言やせぬかと氣をつけてゐたが、時計が十時を打つと、皆寝て了つた様だ。お定は若しも明朝寢坊をしてはと、漸やうく々々涙を拭つて蒲團を取出した。

三分心の置洋燈を細めて、枕に就くと、氣が少し暢ゆつたり然した。お八重さんももう寝たらうかと、又しても友の上を思出して、手を伸べて掛蒲團を引張ると、何となくフワリとして綿が柔かい。郷里で着て寝たのは、板の様に薄く堅い、荒い木綿の飛かすり白の皮をかけたのであつたが、これは又源助の家で着たのよりも柔かい。

そして、前にゐた幾人の女中の汗やら髪の毛の膩あぶらやらが浸みてるけれども、お定には初めての、黒い天鷲絨の襟がかけてあつた。お定は不圖、丑之助がよく自分の頬ほつぺた片を天鷲絨の様だと言つた事を思出した。

また降り出したと見えて、蕭かな雨の音が枕に傳はつて來た。お定は暫時恍乎しばらぼんやりとして、自分の頬を天鷲絨の襟に擦つて見てゐたが、幽かな微笑を口元に漂はせた儘で、何時しか安らかな眠に入つて了つた。

目が覺めると、障子が既に白んで、枕邊の洋燈は昨晚の儘に點いてはゐるけれど、光が鈍く※々《じゝ》と幽かな音を立ててゐる。寢過しはしないかと狼狽うろたへて、すぐ寢床から飛起きたが、誰も起きた様子がない。で、昨日まで着てゐた衣服きものは手早く疊んで、萌黄の風呂敷包から、荒い縞の普通着ふだんぎ（郷里くにでは無論普通に着なかつたが）を出して着換へた。帯も紫がかつた縷子のものは疊んで、幅狭い唐縮緬を締めた。

奥様が起きて來る氣色がしたので、大急ぎに蒲團を挿入に入れ、しきり劃の障子をあげると、『早いね。』と奥様が聲をかけた。お定は臺所の板の間に膝をついてお叩頭じぎをした。

それからお定は吩咐いひつけに随つて、焜爐こんろに炭を入れて、石油を注

いで火をおこしたり、縁側の雨戸を繰つたりしたが、

『まだ水を汲んでないぢやないか。』

と言はれて、臺所中見　　したけれども、手桶らしいものが無い。
すると奥様は、

『それ其處にバケツがあるよ。それ、それ、何處を見てるだらう、
此人は。』と言つて、三和土たゝきになつた流場の隅を指した。お定は、
指された物を自分で指して、叱られたと思つたから顔を赤くしな
がら、

『これでごあんすか？』と奥様の顔を見た。バケツといふ物は見
た事がないので。

『然うとも。それがバケツでなくて何ですよ。』と稍御機嫌が悪

い。

お定は、怎 物に水を汲むのだもの、俺には解る筈がないと考へた。

此家では、『水道』が流場の隅にあつた。

長火鉢の鐵瓶の水を代へたり、方々雑布を掛けさせられたりしてから、お定は小路を出て一町程行つた所の八百屋に使ひに遣られた。奥様は葱とキヤベージを一個買つて來いといふのであつたが、キヤベージとは何の事か解らぬ。で、恐るゝ聞いて見ると、『それ^{こんな}ので（と兩手で圓を作つて）白い葉が堅く重なつてるのさ。お前の郷里^{くに}にや無いのかえ。』と言はれた。でお定は、『ハア、玉菜でごあんすか。』と言ふと、

『名は怎どうでも可いいから早く買つて來なよ。』と急せき立てられる。お定はまた顔を染めて戸外へ出た。

八百屋の店には、朝市へ買出しに行つた車がまだ歸つて來ないので、昨日の賣残りが四種五種列べてあるに過ぎなかつたが、然しお定は、其前に立つと、妙な心地になつた。何とやらいふ菜に茄子が十許り、脹はちき切れさうによく出來た玉キャベヂ菜が五個六個、それだけではあるけれ共、野良育ちのお定には此上なく慕かしい野菜の香が、仄かに胸を爽さわやかにする。お定は、露を帶びた裏畑を頭に描き出した。ああ、あの紫色の茄子の畝うね！ 這はひ蔓びこつた葉に地面を隠した瓜畑！ 水のような暁の光に風も立たず、一夜さを鳴き細つた蟲の聲！

萎びた黒縹子の帯を、ダラシなく尻に垂れた内儀おかみに、『入來いらつしやい。』と聲をかけられたお定は、もうキヤベーチといふ語を忘れてゐたので、唯『それを』と指さした。葱は生憎あひにく一把もなかつた。

風呂敷に包んだ玉菜一個を、お定は大事相に胸に抱いて、仍且やはり郷里くにの事を思ひながら主家に歸つた。勝手口から入ると、奥様が見えぬ。お定は密りこつそと玉菜を出して、膝の上に載せた儘、暫時しばしは飽かずも其香を嗅いでゐた。

『何してるだらう、お定は？』と、直ぐ背後うしろから聲をかけられた時の不きまり愍わるさ！

朝食後の始末を兎に角終つて、旦那様のお出懸に知らぬ振をして出て來なかつたと奥様に小言を言はれたお定は、午前十時頃、何を考へるでもなく呆然と、臺所の中央まんなかに立つてゐた。

と、他所行の衣服を着たお吉が勝手口から入つて來たので、お定は懐かしさに我を忘れて、『やあ』と聲を出した。お吉は些ちよつと笑顔を作つたが、

『まあ大變な事になつたよ、お定さん。』

『怎どうしたべす?』

『怎したも恚いうしたも、お郷里くからお前さん達の迎へが來たよ。』

『迎へがすか?』と驚いたお定の顔には、お吉の想像して來たと反對に、何ともいへぬ嬉しさが輝いた。

お吉は暫時しばらく呆れた様にお定の顔を見てゐたが、『奥様は被居いらつしやるだらう、お定さん。』

お定は頷うなづいて障子の彼方を指した。

『奥様にお話して、これから直ぐお前さんを伴つれてかなげやならないのさ。』

お吉は、お定に取次を頼むも面倒といった様に、自分で障子に手をかけて、『御免下さいまし。』と言つた儘、中に入つて行つた。お定は臺所に立つたり、右手を胸にあてて奥様とお吉の話を洩れ聞いてゐた。

お吉の言ふ所では、迎への人が今朝着いたといふ事で、昨日上げた許りなのに誠に申譯がないけれど、これから直ぐお定を歸し

てやつて呉れと、言葉滑らかに願つてゐた。

『それはもう、然ういふ事情なれば、此方で置きたいと言つたつて仕様がなない事だし、伴れて歸つても構ひませんけれど、』と奥様は言つて、『だけどね、漸つと昨晩來た許りで、まだ一晝夜にも成らないぢやないかねえ。』

『其處ン所は何ともお申譯がございませぬのですが、何分手前共でも迎への人が來ようなどは、些とも思懸けませんでしたので。』

『それはまあ仕方がありませんさ。だが、郷里といつても隨分遠い所でせう?』

『ええ、ええ、それはもう遙と遠方で、南部の鐵瓶を拵へる處よ

りも、まだ餘程田舎なさうでございます。』

『其處そんなからまあ、よくねえ。』と言つて、『お定や、お定や。』

お定は、怎どうやら奥様に濟まぬ様な氣がするので、怖る怖る行つて坐ると、お前も聞いた様な事情だから、まだ一晝夜にも成らぬのにお前も本意ほんいないだらうけれども、この内儀おかみさんと一緒に歸つたら可よからうと言ふ奥様の話で、お定は唯顔を赤くして堅くなつて聞いてゐたが、聽てお吉に促されて、言葉寡ことばすくなに禮を述べて其家を出た。

おもと 戸外へ出ると、お定は直ぐ、

『甚どんな人だべ、お内儀かみさん！』と訊いた。

『いけ好かない奥様だね。』と言つたが、『迎への人かえ？ 何

とか言つたけ、それ、忠吉さんとか忠次郎さんとかいふ、
 頭まの腹でつの大かい人だよ。』
 禿はげあた

『忠太ツて言ふべす、そだら。』

『然さうく其忠太さんさ。面白い言葉な人だねえ。』と言つたが、
 『來なくても可いのに、お前さん達許り詰らないやね、態わざ々出
 て來て直ぐ伴れて歸られるなんか。』

『眞ほんに然さうでござんす。』と、お定は口を噤んで了つた。

稍あつてから又、『お八重さんは怎どうしたべす?』と訊いた。

『お八重さんには新太郎が迎ひに行つたのさ。』

源助の家へ歸ると、お八重はまだ歸つてゐなかつたが、腰まで
 しか無い短い羽織を着た、布袋の様に肥つた忠太爺が、長火鉢に

源助と向合つてゐて、お定を見るや否や、突いきなり然、

『七日八日見ねえでる間に、お定ツ子ア遙ぐっと美え女子をなごになつた喃なあ』と四邊あたり構はず高い聲で笑つた。

お定は路々、郷里から迎ひが來たといふのが嬉しい様な、また、其人が自分の嫌ひな忠太と訊いて不満な様な心地もしてゐたのであるが、生れてから十九の今まで毎日々々慣れた郷里くにことば言葉を其儘に聞くと、もう胸の底には不満も何も消えて了つた。

で、忠太は先ず、二人が東京へ逃げたと知れた時に、村では兩親初め甚どんなに驚かされたかを語つた。源助さんの世話になつてゐなれば心配はない様なものの、親心といふものは又別なもの、自分も今は忙がしい盛りだけれど、強たつての頼みを辭こぼみ難く、態わざ々々

迎ひに來たと語るのであつたが、然し一言もお定に對して小言がましい事は言はなかつた。何故なれば忠太は其實、矢張源助の話^を聞いて以來、死ぬまでには是非共一度は東京見物に行きたいものと、家には働手が多勢ゐて自分は閑人なところから、毎日考へてゐた所へ、幸ひと二人の問題が起つたので、構はずにや置かれぬから何なら自分が行つて呉れても可いと、不取敢氣の小さい兼大工を説き落し、兼と二人でお定の家へ行つて、同じ事を遠くどくとしに諄々と喋り立てたのであるが、母親は流石に涙顔をしてゐたけれども、定次郎は別に娘の行末を悲觀してはゐなかつた。それを漸々納得やうくさせて、二人の歸りの汽車賃と、自分の片道だけで可いといふので、兼から七圓に定次郎から五圓、先づ體の可い

官費旅行の東京見物を企てたのであつた。

廳てお八重も新太郎に伴れられて歸つて來たが、坐るや否や先づ險けはしい眼尻を一層險しくして、凝ちつと忠太の顔を睨むのであつた。忠太は、お定に言つたと同じ様な事を、繰返してお八重にも語つたが、お八重は返事も碌ろく々くせず、脹ふくれた顔をしてゐた。

源助の忠太に對する驩くわん待たい振ふりは、二人が驚く許り奢おごつたものであつた。無論これは、村の人達に傳へて貰ひたい許りに、少しは無理までして外見みえを飾つたのであるが。

其夜は、裏二階の六疊に忠太とお八重お定の三人枕を並べて寢せられたが、三人限きりになると、お八重は直ぐ忠太の膝をつねりながら、

『何しや來たす此人このふとア。』と言つて、執念しつこくも自分等の新運命を頓挫させた罪を詰なぢるのであつたが、晩酌に陶然とした忠太は、間もなく高い軒をかいて、太平の眠に入つて了つた。するとお八重は、お定の温しくしてるのを捉へて、自分の行つた横山様が、何とかいふ學校の先生をして、四十圓も月給をとる學士様な事や、其奥様の着てゐた衣服の事、自分を大層可愛がつてくれた事、それからそれと仰々しく述べ立てて、今度は仕方がないから歸るけれど、必ず又自分だけは東京に來ると語つた。そしてお八重は、其奥様のお好みで結はせられたと言つて、生れて初めての庇髮に結つてゐて、奥様から拜領の、少し油染みた焦橄欖こげおりいぶのリボンを大事相に挿さしてゐた。

お八重は又自分を迎ひに来て呉れた時の新太郎の事を語つて、
『那^{あんな} 親切な人ア家^えの方にや無^ねえす。』と讚めた。

お定はお八重の言ふが儘に、唯温しく返事をしてゐた。

その後二三日は、新太郎の案内で、忠太の東京見物に費された。
お八重お定の二人も、もう仲々來られぬだらうから、よく見て行
けと言ふので、毎日其お伴をした。

二人は又、お吉に伴れられて行つて、本郷館で些少な土産物も
も買ひ整へた。

お八重お定の二人が、郷里を出て十二日目の夕、忠太に伴れられて、上野のステーションから歸郷の途に就いた。

貫通車の三等室、東京以北の總あらゆる有國々の訛なまりを語る人々を、ぎつしりと詰めた中に、二人は相並んで、布袋の様な腹をした忠太と向合つてゐた。長いくプラットホームに數限りなき掲燈あかりが晝の如く輝き初めた時、三人を乗せた列車が緩やかに動き出して、秋の夜の暗を北に一路、刻一刻東京を遠ざかつて行く。

お八重はいふ迄もなく、お定さへも此時は妙に淋しく名殘惜しくなつて、密々こそくと其事を語り合つてゐた。此日は二人共庇髮に結つてゐたが、お定の頭にはりボンが無かつた。

忠太は、棚の上の荷物を氣にして、時々其を見上げ見上げしな

がら、物珍し相に乗合の人々を、しげしげと見比べてゐたが、一時間許り經つと少し身體を屈めて、

『尻けつ了痛くなつて來た。』と眩くらやいた。『汝うな了痛くねえが？』

『痛くねえす。』とお定は囁いたが、それでも忠太がまだ何か話欲かしさうに屈かんでるので、

『家えの方でヤ玉菜だの何えア大きくなつたべなす。』

『大きくなつたどもせえ。』と言つた忠太の聲が大きかつたので、
周圍あたりの人は皆此方を見る。

『汝うな了共あ了逃げでがら、まだ二十日にも成んめえな。』

お定は顔を赤くしてチラと周圍を見たが、その儘返事もせず俯うつむいて了つた。お八重は顔を蹙しかめて、忌々し氣に忠太を横目で見て

ゐた。

十時頃になると、車中の人は大抵こくりくと居みねむり睡むりを始めた。忠太は思ふ様腹を前に出して、グツと背後うしろに凭もたれながら、口を開けて、時々いびき躰いびきをかいてゐる。お八重は身體を捻つて背中合せに腰掛けた商人體の若い男と、頭を押接つけた儘、眠つたのか眠らぬのか、凝ちっとしてゐる。

窓の外は、機關車に悪い石炭を焚くので、雨の様な火の子が横様に、暗を縫うて後ろに飛ぶ。懷手をして圓あごい頤あごを襟に埋めて俯いてゐるお定は、郷里を逃げ出して以來の事を、それからそれと胸に數へてゐた。お定の胸に刻みつけられた東京は、源助の家と、

本郷館の前の人波と、八百屋の店と、への字口の鼻先が下向いた奥様とである。この四つが、目眩めまぐろしい火光あかりと轟々たる物音に、遠くから包まれて、ハツと明るい。お定が一生の間、東京といふ言葉を聞く毎に、一人胸の中に思出す景色は、恐らく此四つに過ぎぬであらう。

廳てお定は、懷手した左の指を少し許り襟から現して、柔かい己が頬そつを密なと撫でて見た。小野の家で着て寝た蒲團の、天鷲絨の襟を思出したので。

瞬く間、窓の外が明るくなつたと思ふと、汽車は、とある森の中の小さい驛パッスを通過した。お定は此時、丑之助の右の耳み朶たぶの、大きい黒子ほくろを思出したのである。

新太郎と共に、三人を上野まで送つて呉れたお吉は、さぞ今頃、此間中は詰らぬ物もの入いりをしたと、寝物語に源助にこぼしてゐる事であらう。

青空文庫情報

底本：「石川啄木作品集 第二巻」昭和出版社

1970（昭和45）年11月20日発行

※底本の疑問点の確認にあたっては、「啄木全集 第三巻 小説」筑摩書房、1967（昭和42）年7月30日初版第1刷発行を参照しました。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2003年3月20日作成

2012年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天鷲絨

石川啄木

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>